

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	座間市立児童発達支援センター サニーキッズ (児童発達支援)		
○保護者評価実施期間	2026年 1月 20日		2026年 2月 20日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	52	(回答者数) 30
○従業者評価実施期間	2026年 1月 22日		2026年 2月 5日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	13	(回答者数) 12
○事業者向け自己評価表作成日	2026年 3月 6日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	<ul style="list-style-type: none"> 発達に即した日常生活動作の獲得や集団での過ごしについて、子どものペースで安心して積み重ねていけるよう、取り組みやすく・過ごしやすい環境調整のもとで支援提供をしています。 子どもたちの変化に応じて必要な環境選択ができるよう、所属クラスや登園日数の変更など、柔軟な対応をしています。 	<ul style="list-style-type: none"> 発達年齢やタイプ、併行通園先(幼稚園/保育園)での過ごしを考慮したクラス編成/配置を行っています。 基本的な取り組みの枠組みを毎年見直し、職員で共有することで、安定した支援環境を提供できるよう努めています。 子どもの様子について保護者・併行通園先(幼稚園/保育園)、他関係機関と共有し、通園の目的や取り組みを整理しながら必要な環境の選択ができるよう支援しています。 	<ul style="list-style-type: none"> 発達や障がい特性の面から子どもを的確に捉えて個別支援計画を作成できるよう、5領域に着眼したアセスメントやプログラム構成の質の向上を図っています。 重度または重複する障がい、医療的ケア等を必要とする子どもが安心安全に通園できるよう支援体制の構築に努めます。 関係機関に向けて事業概要や提供サービスについて知っていただく機会を設け、円滑な連携関係構築に努めます。
2	<ul style="list-style-type: none"> 児童発達支援管責任者や保育士をはじめ理学・作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士などの専門職が連携し、一人ひとりの状況に応じたきめ細やかな支援を実施しています。 	<ul style="list-style-type: none"> 専門職が定期的にクラス活動に参加し、子どもの現状を見立て適切な課題設定や環境調整について助言を行うなど、保育士と連携を図っています。 直接支援を担うクラス職員と児童発達支援管理責任者が全体像(現状)や見通しについて共有/協議し、継続かつ実現性のある個別支援計画を作成し実践に努めています。 	<ul style="list-style-type: none"> 専門職や中核職員による専門的支援の順次導入、定着に取り組めます。 職員に向けた研修や実際の支援場面を通じた経験と学びの機会を計画的に設け、事業所全体の支援スキル向上に努めていきます。
3	<ul style="list-style-type: none"> 保護者がお子さんの状態等について緩やかに理解を深めながら、成長を見守っていけるよう観察や相談・情報提供の機会を提供し、複数職種/職員で支援を行っています。 児童発達支援管責任者や理学・作業療法士、言語聴覚士や臨床心理士、相談支援専門員などの専門職による保護者向け講話/情報提供の機会を提供しています。 	<ul style="list-style-type: none"> 定期的に観察機会を設け、その時々のお子さんの様子や変化を共有し、ご家庭等での様子や過ごしへの困り感などについて保護者が無理なくできる対応方法をともに考えています。 セルフプラン作成に合わせて相談員による聴き取りの機会を設け、子どもや家庭に必要な環境を整理し、必要な相談や情報提供をしています。 就園就学や病院受診、他資源の利用などライフステージの動向に合わせて、多職種が連携し伴走支援を行っています。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者と支援者が無理なく対話の機会を持てるよう、観察や面談等の実施方法について工夫していきます。 ライフステージ/保護者ニーズ等を考慮した講話・情報提供の機会を計画的に設けていきます。また、参加に障壁のあるご家庭に向けた代替的な手段について模索していきます。 多職種が連携し、相談/情報提供を行います。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	子どもが意欲的に取り組み、活動の幅を広げていくための環境整備として、粗大遊具や各種教材、おもちゃの充実がのぞまれます。	規模拡大(センター化)を経て、取り組みが深まり時間やスペースの組み立て/活用への協議が進み、充実への期待が高まっていますと考えます。	<ul style="list-style-type: none"> 現状所有する各種遊具、教材の活用について職員が共通理解を深める機会を設けていきます。 子どもの過ごし、5領域に基づく支援プログラムを考慮し、順次新規遊具や各種教材を揃えていくよう努めます。
2	地域とのつながりが十分ではありません。	立地、事業特性および移転からの時間経過の浅さが影響していると考えます。	<ul style="list-style-type: none"> 児童発達支援センターの機能や働きについて、地域住民がふれる機会を模索していきます。 保育園交流や公園外出など、子どもが施設外で活動する機会を設けていきます。
3	連絡ツールなどのICT化が遅れています。	事業所内で導入に関する内容や、優先順位の検討に至っていないことに加え、実施に必要な機器が十分に揃っていないことが要因として考えられます。	<ul style="list-style-type: none"> 保護者ニーズと業務効率化双方の視点から優先順位を検討し、ICT導入を模索していきます。